
伊豆箱根鉄道駿豆線《いずはこねてつどうすんずせん》

龍城野球小僧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いすはこねてつどうすんすせん
伊豆箱根鉄道駿豆線

【Nコード】

N5773Y

【作者名】

龍城野球小僧

【あらすじ】

伊豆の中央を縦断する「伊豆箱根鉄道 駿豆線」の車掌をしている主人公。

たった3両のローカル電車で起こるドラマを自分は見逃さない。

修善寺（しゅぜんじ）駅

車掌の朝は早い。

春とはいえ、まだ肌寒い日が続く。特に朝は。

世間ではもう出会いの季節が始まるのだろう。しかし自分はいつも車掌室の中。出会いは少ない。だがそれでも発見はある。この伊豆箱根鉄道を利用する乗客を見ているだけで。

おもしろいものだ。

たった3両のこのローカル電車（自分でいうのも何だが）で起こるドラマが。

そんな光景を見れるこの職に就くことができたのは幸せなのだ。今さらながら思う。

いや、今までの経験があったからこそ、この仕事の本当のたのしさを知ることができたのかもな…

おっと、気が付けばもうこんな時間だ

手元にある出発の合図のボタンをぐっと押す。

学生服を着た少年が駆け足で青と銀色の車両に乗る。

さあて今日はどんな人に出会うのだろう。

アナウンスが流れてドアが閉まる。車体はゆっくり動き出す。

口元は自然と緩んでいた。

修善寺駅 牧之郷（まきのこう）駅

この修善寺もずいぶんとまあ変わったもんだ。

おらが9歳の頃、対戦が終わった。この伊豆も例のごとく空襲を受けた。

朝、お袋の、言葉では言い表せないほどの悲鳴で目が覚めた刹那、外は炎の壁が立ち込めていて、目を疑った。

逃げられないと思った。

このまま死ぬのかと思った。

町の大人たちの助けもあって、九死に一生を得たおらはあの日以降、命のありがたみを忘れたことはない。

しかしあれからもう70年は経つだろうか。

一時この修善寺も栄え、伊豆温泉郷のひとつとして賑わったものだったが、景気もすっかり悪くなっちまって…。

昔得たものつてのは、やっぱり失っちまうもんなのか。町もすっかり廃れて、女房にも先に逝かれ…。ガキの頃の友達だった、トモゾーもジローもケンチンも、初恋の相手だったトモコも、今は皆墓り中だ。

周りの奴らはどんどんいなくなっちまうのは、やっぱり寂しい。悲しい。

けれど、今は一人でも、一人で生きてきた訳じゃあない。
だったらそんなに悲観しなくてもいいか。それなりにやりたいこ
ともしてきたし。

あとひとつやり残した事があるとしたら…

「牧之郷、牧之郷です」

重たい足を動かし、外に出る。若い車掌さんがいい面構えで 窓か
ら顔を出している。

「おい、その若いの。これをやるづら。」
そう言っつて『それ』と、未来の行く末を車掌さんに託した。

朝日がやけにまぶしかった。

牧之郷駅

あまり利用が多いとは言えない（とつかむしろかなり少ないと言った方がいいのだが）牧之郷でもう結構な歳をとっているのではないだろうか、一人の老人がホームへ降りた。

なんだか気分良さそうであつたのだが、その男性はこちらに向かって歩いてくるや否や、自分に

『それ』を託した。

今日もずいぶん幸先いいな。

あの人の表情を見た限りでは、あの人もこの電車に乗って何かを得たのだろうか。

そう。自分は、今までも幾度となくそういう人の姿を見てきた。

この電車にはそういった不思議な力があるのだろうか。（こんな風に思ってしまうのは世に言う「厨二病」なのか？）

たいていの人はこのローカルな「伊豆っぱこ」に何の魅力も感じないだろう。なんせ正直なはなし自分もこの伊豆箱根鉄道に入社した当初、そんな大勢の内の一人だったのだから…。

…おつとこんな回想にふけっている場合じゃなかった。出発の間だ。

楽しみはまだ後にもとっておきたいしな。

老人から預かった『それ』を備え付けの（自分が付けたのだが）缶々に入れて、出発の合図をした

牧之郷駅（後書き）

「伊豆っぱこ」とは、地元の人の伊豆箱根鉄道の愛称です。

牧之郷駅 大仁駅

平日の昼間の時間、つまりフツの学生なら当然学校にいる時間、俺は平然とこのローカルな電車に乗っていた。

一人っ子だからか、親から溺愛され、だからろくにしかられた事もない。中学までは、わりとフツの奴だったが、高校に入って激変した。

悪い友達とツルむようになったのをきっかけに、次第に学校に行かなくなり、髪を染め、タバコも吸うようになった。

(いつからおれはこんなになっちまったんだ…)
と叫ぶ本当の俺は、心のどこか奥底に追いやられていた。なんせ今の方が居心地がいい。
まだ退学届は出してないが、じきにやめよう。

つれの待つ三島(終点)までの切符を買い、電車に乗り込んだ。
4人座れる座席をひとりでどかっと座る。やっぱり心地いい。そんなことを思いつつ、電車に揺られること数分、横から声がした。

「おい、君い。それじゃあ座れんだろう。」振り向くと、そこにははげおやじがいた。「アア!？」と威勢良く反抗しようとした矢先、更なる追い打ちが来た。

「そんなに足を伸ばして座って、しかも自分の荷物まで椅子にのせて、君の荷物はそんなに疲れているのか。マナーや常識つてもんがあるだろう。それでいて、そんなカツコや態度だけいっちょ前なぶりして、世の中甘く見すぎだ!！」

俺は度肝を抜かれた。俺は今までこんなに怒られたこともなかった。しかもこんな赤の他人に。

反抗しようもなかった。全部事実だから。ただカッコいいと思っ
てこんな格好して、髪も染めて、大人になった気でいた。でも何も
分かつちやいなかった。

それをこのはげおやじが怒鳴るまで気づかなかった。

俺は素直に足をどけ、荷物を膝の上にのせた。隣にはげおやじが
座ってきたから
めつつや気まずい。

でもこうとも思った。「これは自分を変えるチャンスじゃないの
か？」と。

ろくに親にもしかられずに生きてきたが、こんな初見のジジイにベ
クトルを修正させられた。

今まで心の奥底に追いやられていた真の自分が帰ってきた気がし
た。いや、呼び戻された。この赤の他人のジジイによって。親じゃ
なく。

ただならぬ縁を感じた。

進行方向とは逆方向の加速度を感じ、次の駅に着くのだと確信
した。

髪も伸びたし、黒く染め直しに美容院でも行くか。たしか駅前に
あったよな。

そう思い席を立つとジジイと目が合った。

体が勝手に頭を下げていた。頭を上げるとジジイは優しい目でう
なずいた。

(ありがとよ、ジジイ)

心の中でそう言って、電車を降りてから気が付いた。

終点までの切符買ったじゃねえか。

…まあ今までのツケだな。

暗い暗いトンネルの出口が見えた気がした。

大仁駅

「大仁、大仁です」

アナウンスのボタンを押し、ドアを開けると金髪の少年が降りていった。

見た目は感じ悪い今時の少年という感じだったが 雰囲気はどこか吹っ切れたような、爽やかな印象を受けた。

人は見た目によらず、ということかな。自分の目が正しければ。

大仁はこの近辺（この市の中では）栄えている方だ（あくまでも伊豆の中での話だ）。

大通りに出れば、そこそこ食べ物屋もあるし、人も集まる。温泉もある。

自分もこの伊豆を縦断するローカル電車の車掌だ。観光客におすすめスポットとか聞かれたら答えられるようにしないと。

そうだ、さっきの続きだ。

確かに、入社した当初はこの伊豆箱根鉄道になんの魅力も感じなかった。

高校時代もこの電車に乗って、毎日通っていたが 都会のと比べてものすごい揺れるわ、料金は高いわ（定期券だったが）、いいところなんてひとつもないじゃないかって思ってた。せいぜい観光客が窓ごしの流れゆく風景にちよっぴり感銘を受けるくらいだ。

だけど、就職して毎日毎日同じ線路の上を走り続けて、乗り降り

するいろんな人の顔を見て思ったのだ。

比べる必要があるのか

つて。S u i c aも使えて、車体も揺れないで。そんなことはきくと『伊豆っぱこ』には求められていないんじゃないか？

不便だけど、なんだか暖かいぬくもりを感じる、それが『伊豆っぱこ』の求められてるものだろう。きっと。

よし、行くか。

『伊豆っぱこ』は更なる都会に向けて、上っていく。

大仁駅（後書き）

今回も拙い文章ですが、お読みくださりありがとうございます。

さて、今回は大仁駅ということで電車は停車していましたが、このあたりから窓越しに富士山が見えます。進行方向に。

僕のこの小説に登場するキャラクターには誰一人として名前がついてませんが、ご想像におまかせします。

ではまたいつか。

大仁駅 田京駅

先日の朝未明、母さんが息を引き取った。 68歳という平均寿命にも満たない歳で。

親父は俺の小さい頃にはもう死んでいて、記憶すらない。それから女手ひとつで俺を育ててくれた。

それなのに何故こんな電車なんか乗ってるのだった？

それは俺が小さい頃、その向かいに座っている親子のように、母さんと手を繋いで電車に乗った記憶があるからで、もう一度母さんとの思い出を振り返るのにはいい場所だと思ったからだ。

少々騒がしいことを除けば。

小学校のころだったけな。毎日昼は給食だったが、時々弁当の日があつて。

みんなはその日をすごく楽しみにしていたが、俺だけは違った。

昼ご飯の時間になって、みんなが騒いで席をくつつけ合っている中、一人弁当箱を片手に教室を出た。

「一緒に食おうぜ」と友達に誘われたが、他のクラスの奴と食べるつつつて断った。

そして俺は誰もいない使われていない教室で一人弁当箱を開けるのだった。

一面真っ白なご飯の真ん中に梅干しがぼつん。世にいう「日の丸弁当」。おまけにバナナが一本。

悔しかった。

みんなと一緒に食べたかった。

けどそれは俺には出来なかった。みんなに変な目で見られるのが怖くて。

白いご飯はこぼれる涙で少し味がついていた。

だけど母さんに文句も言えなかった。朝から夜遅くまで頑張ってるだけで、でもそれでも貧乏だっただけを十分分かっていただけから。

小6の運動会。小学校で最後の運動会に母さんは「今年も行けるから。応援するからねっ。」と朝言った。今まで憂鬱だった運動会も張り切っていったなあ。

100メートル走。俺が走る番だった。決して足は速くないが、母さんの応援があるから大丈夫だと思ってスタートラインに立つ。

ピストルが鳴った。スタートは悪くない。

カーブにさしかかったところで母さんの姿が見えた。でも…

ビリだった。同じレースには学年でも1、2を争う奴がいた。

直後が昼休みだったから本当なら飛んで母さんのところへ行くはずだったがうつむいて行った。

母さんは笑顔で出迎えてくれた。途端涙腺が崩壊した。

「ほらほら、泣かないの。あんたがあんなに足が速いなんて知らなかったよ。お父さんの血かしらね。ほら今日は豪華なお弁当だからたくさん食べなさい。」

いつもの真っ白で殺風景な弁当じゃなかった。唐揚げも、ハンバーグもあった。

俺の涙は2種類の涙だったが、決して中和されることはなかった。

みつともないな、俺。こんな公共の場で大の大人が泣いたりしてなあ『伊豆つばこ』よ。俺の周りだけでいいから俺を一人にしてくれないか？

その願いは叶わなかった。母さんと同じくらいの歳の婆さんがやって来て俺の隣に座る。

その婆さんはこちらをちらと見るとこう言った。

『大切な人を亡くしたようねえ。だけんどねえ、前に進まなきゃあ始まんねえらよ。その人のお骨をひとつ小さな苗木の下に埋めなさい。その木を大切に育てればいいだろうよ』

俺はこの婆さんが魔女かと思った。でもこれも何かの縁。信じてみるか。

「田京、田京です。」

俺は早速駅から徒歩5分にあるホームセンターでオレンジの苗木を買って庭に母さんの骨と一緒に植えた。

そのオレンジの木に母さんと同じ名前をつけた。

大仁駅 田京駅（後書き）

この小説を書いている途中、感情移入し過ぎて何回も涙してしまいました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5773y/>

伊豆箱根鉄道駿豆線《いずはこねてつどうすんずせん》

2011年11月20日18時59分発行